
 その他

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究 8
P. 70 - 77 (2020)

看護学 OSCE (Objective Structured Clinical Examination) への 心肺蘇生シミュレータを用いた教育実施課題の開発と導入・実施

Method Development and Implementation of the Examination Task and Scenario using a Cardiopulmonary Resuscitation Simulator in Nursing OSCE (Objective Structured Clinical Examination)

小川 薫* 酒井 太一* 石塚 淳子* 近藤 ふさえ*

OGAWA Kaoru

SAKAI Taichi

ISHIDUKA Junko

KONDO Fusae

要 旨

順天堂大学保健看護学部では、2015年に3学年次後期の臨地実習前に初めてトライアル Objective Structured Clinical Examination：客観的臨床能力試験（以下 OSCE と略す）をおこなひ、翌年以降毎年3学年次の後期に OSCE を実施している。看護学 OSCE の教育実施課題は臨床実践能力を評価するもので看護技術を中心に4実施課題が設定されてきた。一方、OSCE の前に本学部カリキュラム科目「救急法の理論と実技」（3学年次前期、1単位科目）においては、心肺蘇生シミュレータを用いて日本救急医学会認定 Basic Life Support（以下 BLS と略す）・Intermittent Cardiac Life Support（以下 ICLS と略す）コースが実施され、学生は3学年次前期の臨地実習前までにこの科目を履修することによって救急の際の心肺蘇生術を修得している。しかし、心肺蘇生の OSCE 課題については設備品不足とシナリオ未開発のため設定できていなかった。

今回、看護学 OSCE において心肺蘇生シミュレータを用いた教育実施課題を開発し、この課題を OSCE へ導入・実施した。その結果、学生の救急法における臨床実践能力を評価できるようになり、さらに、その臨床実践能力評価を学生へフィードバックすることで臨地実習に向けた学習促進効果がより高まることが期待された。

また、使用した最新型心肺蘇生シミュレータは ICT 機能を備えて胸骨（心臓）圧迫と人工呼吸による換気のデータをリアルタイムにスコア化し客観的に迅速に評価できる CPR トレーニングマネキンであるため、評価の簡易化が図れたと同時に OSCE の際に模擬患者を募集する手間を省くことができた利点もあった。

索引用語：OSCE、看護教育、心肺蘇生シミュレータ、教育実践課題、シミュレーション教育

Key words：OSCE, Basic life support, Method development, Simulation learning,
Educational task, Cardiopulmonary resuscitation

1. はじめに

医療従事者である看護師は、しばしば心肺停止患者の第一発見者となり得るため、生命にかかわる仕事を希望している医療系学部の教育課程において一次救命

* 順天堂大学保健看護学部

* *Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing*
(Nov. 8, 2019 原稿受付) (Jan. 31, 2020 原稿受領)

処置 (BLS : Basic Life Support、以下 BLS と略す) の技術を身につけることは必要であり、患者の救命率や社会復帰率の向上に寄与することになる¹⁾。

看護教育における心肺蘇生技術の修得について、厚生労働省「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書(平成23年2月)」²⁾では、看護師教育の技術項目と卒業時の到達度の救命救急処置技術の項目の中には、緊急なことが生じた場合にはチームメンバーへの応援要請ができ単独で実施できる、看護師・教員の指導のもとで患者の意識状態の観察を実施できる、モデル人形で気道確保・人工呼吸・心臓マッサージが正しくできる、除細動の原理がわかり AED を正しく操作することができる、意識レベルの把握方法が知識としてわかる、ということが挙げられている。また、看護師に求められる実践能力を育成するための教育方法として、学内でシミュレーションを行うなどして臨地実習に向けて準備をすることにより、効果的に技術を修得することが重要で、特に侵襲性の高い技術、臨地実習で経験できない技術を学内で補完する工夫が求められるとしている。さらに、日本看護系大学協議会「看護系大学課程の臨地実習とその基準作成に関する調査研究報告書(平成30年3月)」³⁾では、看護学の学士課程教育における実習の在り方を考える際、シミュレーション教育を積極的に取り入れて、演習と実習を一体化した教育を行うことで充実させ、学習目標に合わせ、実習だけで到達するのではなく柔軟に、講義、演習と組み合わせる必要があると述べている。日本看護系大学協議会「看護学士課程におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標(平成30年6月)」⁴⁾の中でも、急激な健康破綻と回復過程にある人を援助する能力に対して、到達目標では急激に破綻をきたす疾患、外傷による病態をアセスメントし、基本的な看護援助方法が実施できるという到達目標を達成するための教育内容として“救命救急時の処置”が列挙されている。最近、厚生労働省「看護基礎教育検討会報告書(令和元年10月)」⁵⁾

では、看護師に求められる実践能力と卒業時の到達目標に関して、健康の回復にかかわる実践能力としての基本的な救命救急処置の方法を理解して模擬的に実践できることが求められている。さらに技術項目と卒業時の到達度では、緊急時の応援要請と BLS の修得が明記されている。また、教育内容にシミュレーション等を活用した演習の推進が挙げられるようになってきた。看護学生は患者の身体への侵襲を伴う看護技術を臨地実習中に体験する機会はほとんどないので、救命処置に関しては講義だけでは救急蘇生の理解と実際の手技を身につけることは難しく、生命の危機状態にある患者への治療についてシミュレーション教育を活用した演習で実施することが必要である。

看護実践能力の育成は、看護が実践の科学である限り自明の課題であるが、その能力をアウトカムとして把握することは困難である。看護実践能力は、知識や技術、判断力、倫理観などが統合された能力として位置づけられ、その評価には重層的で多面的な手法が必要とされている。看護実践能力の中でも「観察できる」能力の評価として、Objective Structured Clinical Examination : 客観的臨床能力試験(以下 OSCE)が実施され、看護教育の分野でもその知識が蓄積されつつある。

OSCE の機能について、OSCE そのものがケースシナリオを基本においた系統的評価基準を提供するものであることから、シミュレーション教育に馴染むものである。

今回、看護学 OSCE で教育実施課題に、救命救急の対応としての心肺蘇生シミュレータを用いた BLS 課題を開発し、この課題が機能することを確認、さらに実際の OSCE へ導入・実施した。その成果として BLS 技術の習熟の推移をみることができることや OSCE を受験すること自体が BLS 学習の強化につながることを期待された。

II. 看護学 OSCE における心肺蘇生シミュレータを用いた教育実施課題の開発

1. 目的

OSCE は、医歯学教育においては 2005 年から臨床実習前の「共用試験」として正式に採用されているが、看護学教育においては OSCE を導入している看護系大学はまだ少ない。本学部では 2015 年に 3 学年次後期の臨地実習前に初めてトライアル OSCE を実施し、翌年以降毎年 3 学年次の後期に OSCE を実施している。看護学 OSCE の教育実施課題は、臨床実践能力を評価するもので、現在、看護技術を中心に 4 実施課題が設定されている。しかし、心肺蘇生の OSCE 課題については設備品不足とシナリオ未開発のため設定できていない現状がある。2016 年より本学部カリキュラム科目「救急法の理論と実技」（3 学年次前期、1 単位科目）において日本救急医学会認定 BLS・ICLS コースを実施し、心肺蘇生救急シミュレーション教育に携わってきた⁶⁾。学生は 3 学年次前期の臨地実習前までにこの科目を履修することによって救急の際の心肺蘇生術を修得できる。そこで、OSCE への心肺蘇生シミュレータを用いた教育実施課題の開発と導入をおこなうことにより、学生の救急法における臨床実践能力を評価できるようになり、さらに、その臨床実践能力評価を学生へフィードバックすることで臨地実習に向けた学習促進効果がより高まるようになると考えられる。また、今回使用する最新型心肺蘇生シミュレータについて ICT 機能を備えて心臓圧迫と換気の詳細データをリアルタイムにスコア化し客観的に迅速に評価できる CPR トレーニングマネキンを使用することで、OSCE の際に模擬患者を募集する手間を省くことができる利点もある。

2. 方法

① 心肺蘇生シミュレータを用いた OSCE の「課題・シナリオ」を開発し表 1 のように設定した。

表 1 課題・シナリオ	
課題 心肺蘇生	
【制限時間 10 分】	
<p>あなたは病院の廊下で人が倒れているのを発見しました 三島花子（太郎）さん 70 歳代 女性（男性）入院中の患者さんです 病歴・既往歴などは不明</p> <ul style="list-style-type: none"> ・評価者から『始め』の声掛け後に、患者に接触し心肺蘇生を開始して下さい ・換気については口対口呼吸 フェイスシールドを使用して下さい ・心肺蘇生は 3 分間継続して下さい（評価者から終了の声掛けがあるまで継続して下さい） ・この課題の確認後、事前準備としてフェイスシールドをマネキンの上に寄せ、数回程度テスト換気をして下さい ・心肺蘇生中の換気の際、フェイスシールドはフェイスに置いたまま使用して下さい ・心肺蘇生終了後はフェイスマスクを消毒して下さい <p>なお、機器はすべてあらかじめ正常動作を点検済みです。</p>	
開始～3分（3 分間）：事前確認準備	被験者：課題の確認 フェイスシールドの確認 人口呼吸のテスト換気
	評価者：通信の確認
3分～6分（3 分間）：心肺蘇生	
	評価者：『始め』の合図
	被験者：心肺蘇生を患者発見から 3 分間実施
	評価者：『終了』の合図
6分～7分（1 分間）：調整時間+片付け	
7分～10分（3 分間）：評価	被験者：フェイスマスクの消毒、評価者からフィードバックを受ける
	評価者：被験者のデータを評価表への記入
	iPad Touch の画面で「Saved」（保存）をクリックすると「Saved Results」に Save された結果を見ることができる

表 1 課題・シナリオ

② 心肺蘇生シミュレータはリトルアン QCPR を用いた（図 1）。



図 1 心肺蘇生シミュレータ

③ リトルアン QCPR のトレーニングマネキンは ITC 機能を搭載して心肺蘇生の測定機能を有するため、胸骨（心臓）圧迫データおよび人工呼吸による換気に関するデータをリアルタイムにスコア化して iPad に表示し判定した（図 2）。表示データは、心肺蘇生（以下 CPR と略す）総合スコア、CPR サイクル、胸骨圧迫実施率、胸骨圧迫のリコイル、胸骨圧迫の適正な深さ、胸骨圧迫のテンポ適性率、

人工呼吸の換気スコア、であり、これらのデータ各々を実践能力到達目標の項目に入れた。なお、画面に譜ってある数字番号は後述の評価表の項目番号である。また、そのデータは記録としてPC1台に保存した。OSCEのレーンは4つなので、リトルアンQCPRとiPadは各々4台ずつ用意した。

- ④ OSCE心肺蘇生の機器のレイアウトを図3のように配置した。
- ⑤ 「評価表」を表2のように作成した。評価表の実践能力到達目標については10項目を評価対象として、1. 意識、呼吸、脈拍の確認、2. AEDの要請、3. 適正な胸骨圧迫位置、4. CPR総合スコア、5. 胸骨圧迫実施率、6. CPRサイクル、7. 胸骨圧迫のリコイル、8. 胸骨圧迫の適正な深さ、9.

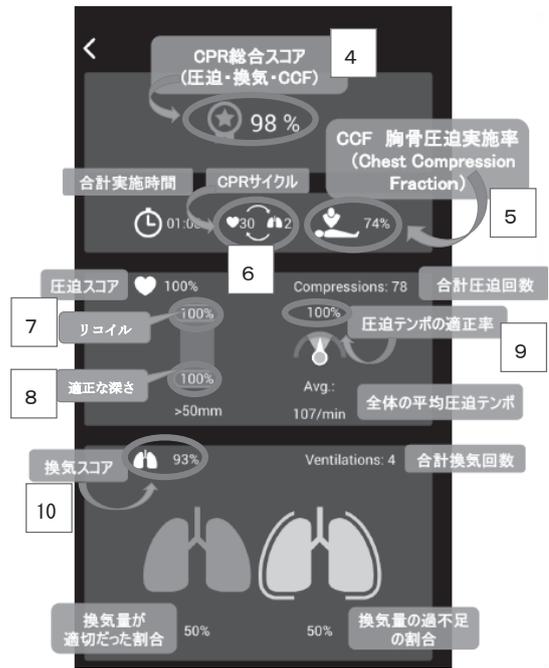


図2 心肺蘇生 iPad評価画面

図3 レイアウト

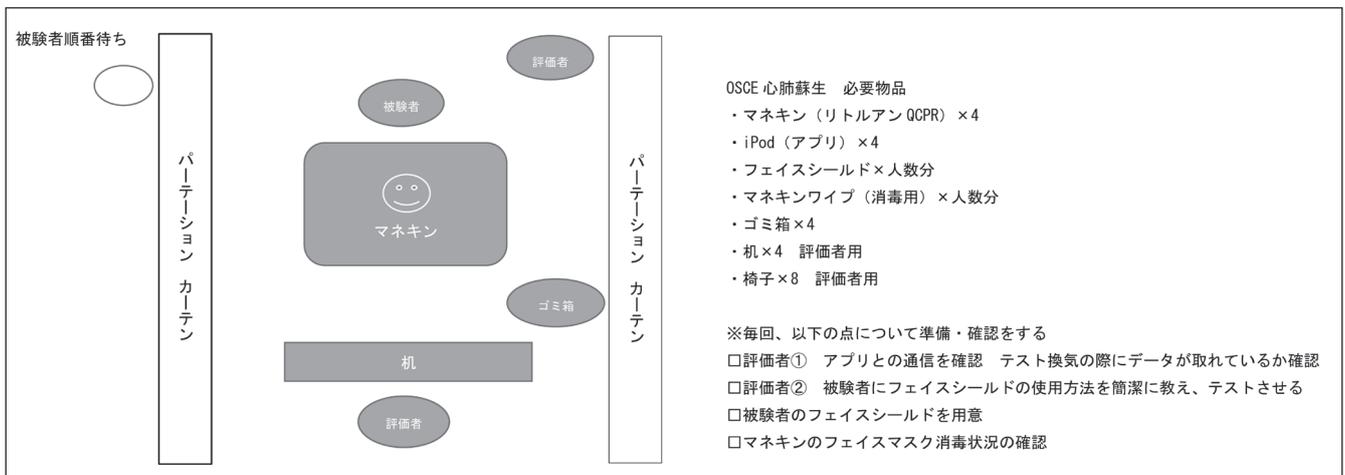


表2 評価表

項目	配点	学生シール貼付			評価者:
		5 (出来る)	3 (まあまあ)	0 (できない)	
1 意識、呼吸、脈拍の確認	5	<input type="checkbox"/> 意識、呼吸、脈拍の確認	<input type="checkbox"/> 意識、呼吸、脈拍のいずれかの確認	<input type="checkbox"/> 確認しない	
2 AEDの要請	5	<input type="checkbox"/> AED要請 はっきりとした声	<input type="checkbox"/> AED要請 はっきりしない声	<input type="checkbox"/> 要請しない	
3 適正な胸骨圧迫位置	5	<input type="checkbox"/> 適正な位置 (胸骨上かつ剣状突起に配慮)	<input type="checkbox"/> 胸骨上付近を押している	<input type="checkbox"/> 違う場所、剣状突起を押している	
4 CPR総合スコア	5	<input type="checkbox"/> 80%以上	<input type="checkbox"/> 50%以上	<input type="checkbox"/> 50%以下	
5 胸骨圧迫実施率	5	<input type="checkbox"/> 80%以上	<input type="checkbox"/> 50%以上	<input type="checkbox"/> 50%以下	
6 CPRサイクル	5	<input type="checkbox"/> 3 0 対 2	<input type="checkbox"/> 近い割合	<input type="checkbox"/> 大きく違う	
7 リコイル	5	<input type="checkbox"/> 80%以上	<input type="checkbox"/> 50%以上	<input type="checkbox"/> 50%以下	
8 適正な深さ	5	<input type="checkbox"/> 80%以上	<input type="checkbox"/> 50%以上	<input type="checkbox"/> 50%以下	
9 胸骨圧迫テンポ適正率	5	<input type="checkbox"/> 80%以上	<input type="checkbox"/> 50%以上	<input type="checkbox"/> 50%以下	
10 換気スコア	5	<input type="checkbox"/> 80%以上	<input type="checkbox"/> 50%以上	<input type="checkbox"/> 50%以下	
合計		50			
【全体評価】					点数
5 学生として優秀	<input type="checkbox"/>	コメント			
4 まあまあ優秀	<input type="checkbox"/>				
3 普通	<input type="checkbox"/>				
2 やや不安	<input type="checkbox"/>				
1 実習前までに補修が必要	<input type="checkbox"/>				
					/50

胸骨圧迫のテンポ適正率、10. 人工呼吸の換気スコア、を各5点満点で総合点は50点満点として評価した。各到達目標の達成度は評価表のように判定基準を設けて、達成度に応じて、5点（出来る）、3点（まあまあ）、0点（できない）と評価した。

⑥ この「課題・シナリオ」を用いて OSCE トライアルを実施した。本学部カリキュラム科目「救急法の理論と実技」をすでに履修し心肺蘇生シミュレータの扱いの経験のある3学年生2名を対象に OSCE トライアル計2回実施した。

3. 結果

- ① 心肺蘇生シミュレータを用いた OSCE の「課題・シナリオ」を設定し、OSCE プレトリアルおよび OSCE トライアルを行い、問題なく運用できた。
- ② OSCE 心肺蘇生の機器のレイアウトは適切であった。
- ③ 使用した「評価表」は適切だった。
- ④ 導入した ICT 心肺蘇生シミュレータは故障なく作動した。
- ⑤ 学生に対して ICT 心肺蘇生シミュレータに習熟す

る機会を OSCE の前に設けた。その結果、学生は OSCE の際に ICT 心肺蘇生シミュレータを問題なく取り扱うことができた。

- ⑥ シミュレータの評価を「iPad」のデジタル画面で行うことができ、その操作は見やすく簡便であった。評価表への記載も問題なくできた。その都度データを保存することが可能だったので、評価表への記載漏れ等に対応可能であった。
- ⑦ 学生2名からの意見として、臨地実習が始まる前に心肺蘇生術の習得は必要であり、その確認のためにも OSCE の課題として導入するのにふさわしい、と述べていた。
- ⑧ 今回開発した課題を2019年9月実施の OSCE 導入へ進捗した。

III. OSCE への心肺蘇生シミュレータを用いた教育実施課題の導入・実施

1. 方法

- ① まず OSCE 実施前の期間を利用して学生に主体的

課題 心肺蘇生

【制限時間 10分】

あなたは病院の廊下で人が倒れているのを発見しました
三島花子（太郎）さん 70歳代 女性（男性）入院中の患者さんです
病歴・既往歴などは不明

- ・評価者から『始め』の声掛け後に、患者に接触し心肺蘇生を開始して下さい
- ・換気については口対口呼吸 フェイスシールドを使用して下さい
- ・心肺蘇生は3分間継続して下さい（評価者から終了の声掛けがあるまで継続して下さい）
- ・この課題の確認後、事前準備としてフェイスシールドをマネキンの上に寄せ、数回程度テスト換気をして下さい
- ・心肺蘇生中の換気の際、フェイスシールドはフェイスに置いたまま使用して下さい
- ・心肺蘇生終了後はフェイスマスクを消毒して下さい

なお、機器はすべてあらかじめ正常動作を点検済みです。

表 3-1 修正後の課題・シナリオ(被験者用)

課題 心肺蘇生

【制限時間 10分】

あなたは病院の廊下で人が倒れているのを発見しました
三島花子（太郎）さん 70歳代 女性（男性）入院中の患者さんです
病歴・既往歴などは不明

- ・評価者から『始め』の声掛け後に、患者に接触し心肺蘇生を開始して下さい
- ・換気については口対口呼吸 フェイスシールドを使用して下さい
- ・心肺蘇生は3分間継続して下さい（評価者から終了の声掛けがあるまで継続して下さい）
- ・この課題の確認後、事前準備としてフェイスシールドをマネキンの上に寄せ、数回程度テスト換気をして下さい
- ・心肺蘇生中の換気の際、フェイスシールドはフェイスに置いたまま使用して下さい
- ・心肺蘇生終了後はフェイスマスクを消毒して下さい

なお、機器はすべてあらかじめ正常動作を点検済みです。

開始～3分（3分間）：事前確認準備
被験者：課題の確認 フェイスシールドの確認 口呼吸のテスト換気
評価者：通信の確認

3分～6分（3分間）：心肺蘇生
評価者：『始め』の合図
被験者：心肺蘇生を患者発見から3分間実施
評価者：『終了』の合図

6分～7分（1分間）：調整時間+片付け

7分～10分（3分間）：評価
被験者：フェイスマスクの消毒、評価者からフィードバックを受ける
評価者：被験者のデータを評価表への記入
iPad Touch の画面で「Saved」（保存）をクリックすると「Saved Results」に Save された結果を見ることができる

(注) 通信：モデル人形と iPad との通信接続（一度セットアップすれば再接続）

表 3-2 修正後の課題・シナリオ(評価者用)

表4 修正後の評価表

項目	評価
1 意識、呼吸、脈拍の確認	<input type="checkbox"/> 5: 意識、呼吸、脈拍の確認
	<input type="checkbox"/> 3: 意識、呼吸、脈拍のいずれかの確認
	<input type="checkbox"/> 0: 確認しない
2 AEDの要請	<input type="checkbox"/> 5: AED要請 はっきりとした声
	<input type="checkbox"/> 3: AED要請 はっきりしない声
	<input type="checkbox"/> 0: 要請しない
3 適正な胸骨圧迫位置	<input type="checkbox"/> 5: 適正な位置(胸骨上かつ剣状突起に配慮)
	<input type="checkbox"/> 3: 胸骨上付近を押している
	<input type="checkbox"/> 0: 違う場所、剣状突起を押している
4 CPR総合スコア	<input type="checkbox"/> 5: 80%以上
	<input type="checkbox"/> 3: 50%以上
	<input type="checkbox"/> 0: 50%未満
5 胸骨圧迫実施率	<input type="checkbox"/> 5: 80%以上
	<input type="checkbox"/> 3: 50%以上
	<input type="checkbox"/> 0: 50%未満
6 CPRサイクル	<input type="checkbox"/> 5: 30対2
	<input type="checkbox"/> 3: 近い割合
	<input type="checkbox"/> 0: 大きく違う

7 リコイル	<input type="checkbox"/> 5: 80%以上
	<input type="checkbox"/> 3: 50%以上
	<input type="checkbox"/> 0: 50%未満
8 適正な深さ	<input type="checkbox"/> 5: 80%以上
	<input type="checkbox"/> 3: 50%以上
	<input type="checkbox"/> 0: 50%未満
9 胸骨圧迫テンポ適正率	<input type="checkbox"/> 5: 80%以上
	<input type="checkbox"/> 3: 50%以上
	<input type="checkbox"/> 0: 50%未満
10 換気スコア	<input type="checkbox"/> 5: 80%以上
	<input type="checkbox"/> 3: 50%以上
	<input type="checkbox"/> 0: 50%未満
【全体評価】	<input type="checkbox"/> 学生として優秀
	<input type="checkbox"/> まあまあ優秀
	<input type="checkbox"/> 普通
	<input type="checkbox"/> やや不安
	<input type="checkbox"/> 実習前までに補習が必要
<コメント>	



図4-1 被験者による課題の確認



図4-2 心肺蘇生術(胸骨圧迫)



図4-3 心肺蘇生術(フェイスシールドを用いた人工呼吸)



図4-4 評価者によるOCSE評価(iPad使用)

学習の機会を与えて BLS 自己学習を促進し学習態度を強化した。

- ② 教育実施課題について、OSCE 委員会での検討により、「課題・シナリオ」、「評価表」を修正した。修正後の「課題・シナリオ」（表 3）と「評価表」（表 4）を示す。これらを用いて OSCE を 2019 年 9 月中旬に実施した（図 4）。
- ③ 心肺蘇生シミュレータはリトルアン QCPR を用いた。
- ④ リトルアン QCPR では胸骨圧迫データおよび換気に関するデータを iPad に表示することができ判定も簡易に行うことができた。判定データは記録として iPad に保存した。OSCE のレーンは 4 つであるが、故障などの機器不具合などへの対策としてリトルアン QCPR と iPad は各々 6 台ずつ準備してから実施した。
- ⑤ OSCE 心肺蘇生の機器のレイアウトを当初の通り配置した。
- ⑥ 「評価表」への記載は、新たに別の「評価表記入用 iPad」に入力用画面を作成して記入した（図 5）。

図 5 評価表記入用 iPad の入力用画面

2. 結果

- ① 課題・シナリオは適切であった。
- ② OSCE 心肺蘇生の機器のレイアウトは適切であった。
- ③ 修正した「評価表」は適切だった。
- ④ 導入した ICT 心肺蘇生シミュレータは故障なく作動した。
- ⑤ BLS 課題の OSCE 得点は全体的には満足いく得点（表 5）であったが、胸骨圧迫のテンポや人工呼吸のペースを強化して教育していく必要があることが明らかになった。

表 5 OSCE 課題評価成績

項目 (各 5 点満点)		評価得点 (平均)
1	意識、呼吸、脈拍の確認	4.41
2	AED の要請	4.63
3	適正な胸骨圧迫位置	4.19
4	GPR 総合スコア	3.28
5	胸骨圧迫実施率	2.96
6	GPR サイクル	3.19
7	リコイル	4.77
8	適正な深さ	4.64
9	胸骨圧迫テンポ適正率	2.59
10	換気スコア	2.36
総合点	50 点満点	36.71
【全体評価】		<input type="checkbox"/> 学生として優秀: 6.1 %
		<input type="checkbox"/> まあまあ優秀: 33.7 %
		<input type="checkbox"/> 普通: 40.7 %
		<input type="checkbox"/> やや不安: 19.1 %
		<input type="checkbox"/> 実習前までに補習が必要: 0.4 %

IV. 考察

一般的に、教育に OSCE を実施する目的について、教育項目である医療・看護技術の習得レベルの評価、ならびにシミュレーション学習の習熟度を評価することにおいているものが多い⁷⁾。この度の BLS 課題の OSCE の目的は両者である。また、OSCE の具体的な運用については、技術演習後自己学習の時間を設けた

のち OSCE 評価をおこなうもの、シミュレーション演習の後に OSCE 評価をおこなうもの、演習や研修の直後と 12 か月後、24 か月後に OSCE を行い能力の推移をみるもの、OSCE 形式のシミュレーションのみ行うもの、などある⁸⁾が、今回の BLS 課題の OSCE はシミュレーション演習後におこなう OSCE 評価にあたる。OSCE の成果では、OSCE 評価点から演習の学習効果と有効な教育方法が明らかになったとするもの、OSCE 得点率からシミュレーション教育の有効性を確認できたとするもの、OSCE により看護技術の項目ごとの習得レベルが明らかとなり学習内容の検討につながったとするもの、OSCE 被験者は OSCE の効果を肯定的に評価していること、など挙げられるが、今回の BLS 課題の OSCE はその得点率からシミュレーション教育の有効性を確認できたとするものである。実際、BLS 課題の OSCE 得点率は高く、カリキュラム科目「救急法の理論と実技」(3 学年次前期、1 単位科目)における心肺蘇生救急シミュレーション演習が教育に有効であったことが明らかになった。また、技術・スキルベースの習熟度を把握するものとして活用できることがわかった。また、看護実践能力の主体的習得に関して、OSCE 被験者はその技術の習熟度が高く、OSCE を通じて被験者の学習態度に良い影響を及ぼしたことが考えられた。

一方、学習支援プログラムの面から OSCE の機能を考慮すると、OSCE 自体がシナリオを基本においた系統的評価基準を提供するものであることからシミュレーション教育に馴染むものである。また、OSCE の評価視点は教育内容分類に類似するものであるから、OSCE 後の学習支援教材として使用しやすい。

V. 結 論

OSCE への心肺蘇生シミュレータを用いた教育実施課題の開発と導入、そして実施を行った。それによって学生の救急法における臨床実践能力を評価できるよ

うになり、さらに、その臨床実践能力評価を学生へフィードバックすることで臨地実習に向けた学習促進効果が高まるようになると期待された。また、OSCE を受験すること自体が主体的学習の強化につながる。

VI. 参考文献

- 1) 総務省消防庁:平成 30 年版救急救助の現況、消防庁、https://www.fdma.go.jp/publication/rescue/items/kkkg_h30_01_kyukyu.pdf (参照 2019-1-11)
- 2) 厚生労働省:看護基礎教育あり方検討会報告書、厚生労働省、<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>(参照 2013-8-30)
- 3) 日本看護系大学協議会:看護系大学学士課程の臨地実習とその基準作成に関する調査研究報告書、日本看護系大学協議会、<http://www.janpu.or.jp/wp-content/uploads/2017/12/H29MEXTProject.pdf>(参照 2018-3-31)
- 4) 日本看護系大学協議会:看護学士課程におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標、日本看護系大学協議会、<http://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf>(参照 2018-6-30)
- 5) 厚生労働省:看護基礎教育検討会報告書、厚生労働省、<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> (参照 2019-10-15)
- 6) 小川 薫、近藤ふさえ、石塚淳子、保健看護学部の看護教育におけるシミュレーション演習を活用した一次+二次救命処置法の授業展開、順天堂保健看護研究 7:54-66、2019.
- 7) 小澤知子、原田竜三、濱田麻由美、川原理香、急性期看護学に実習前課題発見型 OSCE を用いた授業デザインの実践、東京医療保健大学紀要、11:51-57,2016.
- 8) 滝下幸栄、岩脇陽子、山本容子、松岡知子、看護継続教育における OSCE の現状に関する文献検討、京府医大看護紀要、27:57-62,2017.